

どこへ行くボルネオの自然

青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山 肇

昨年 11 月上旬に当会の仲間 5 人と一緒に KL を中心に旅をしました。当時の JICA 事務所長の永江さんとも交流を深めることができました。私が隊員としてサバの地に立ったのは、1980 年 7 月の下旬でした。

32 年間の時を過ぎ、マレーシア国そのものが発展途上国から発展国へ舵をとろうとしています。その象徴が KL にそびえるアジア最大の高層ツインタワーです。マラッカも世界遺産として、多くの観光客が訪れています。外からみると、国際化の中で発展するマレーシアをうかがうことができます。協力隊の派遣にも終止符がうたれる時が近づいています。人々の生活の向上は嬉しいことです。しかし、一方で回顧したくなるような「物探し感」にふっと襲われます。それは、地球が創り上げた素晴らしい自然です。



2010 年 8 月 27 日(キナバタンガン河)

2009 年 9 月 1 日(コタキナバル Wetland Center)

上の 2 枚の写真は、私が勤務する大学での「海外研修」の 1 コマです。ボルネオ島（マレーシア国サバ州）の自然と人々の暮らしを学習するために実施しています。2006 年から 5 年間で延べ 62 名の学生が参加しました。サバ州の環境問題の 1 つは、熱帯林の破壊であり、これは経済に直結しています。熱帯林を伐採し、その後にパーム椰子を植え、オイルを生産物として獲得します。この時、大量の農薬も使用しています。現在、世界の 42% のパームオイルがマレーシアで生産され、外貨獲得に貢献しています。かつてはゴム輸出でありましたが、現在はパームオイルに代わっています。その結果、生物多様性の自然が破壊され、農薬による土壌汚染や水環境が懸念されています。アジア象はかつての生息地を追われ、食を求めて徘徊しています。象だけではありません。オランウータンは、もっと深刻です。

サバ州で活動している協力隊員にも会い、交流を温めることができました。主に環境教育の隊員の活動現場の見学と貴重な意見交換をしたことが、参加した学生の宝として息づいていることと思います。

州都コタキナバルの澄み切った空にメラメラと輝く見事な「夕焼け」、そしてタンジュンアルビーチに寄せるすきとおった水。隊員時代に毎日のように自分の心を癒してくれた「自然」はどこに行ってしまったのでしょうか。

Rindu pada マレーシア

永江 勉



二度目のマレーシア赴任

1980 年 10 月 22 日。私が初めてマレーシアに赴いた日、今からおよそ 30 年前のことになる。

その日から、小職は、青年海外協力隊の隊員として、東マレーシアはボルネオ島北部、サバ州の州都コタキナバルにあったマレーシア国民大学(UKM)サバ分校に派遣され、20 歳代最後に当たる 2 年 2 か月の日々を過ごした^(注1)。

月日は流れ、それから 30 年後、二度目のマレーシア駐在のためにクアラルンプールに赴任した。2010 年 3 月 15 日のことである。赴任先は首都クアラルンプールにある JICA マレーシア事務所。30 年の年月は、私の体型を変え、頭髪の具合も 50 代後半にふさわしい白髪交じりのオジサンに変貌させていた。この 30 年という年月は、私の風貌を変えただけでなく、当然ながらマレーシアという国をも変えるに十分な時間だったことは言うまでもない。

30 年後の、あの人は今



30 年振りに赴任したこの国で、その在勤中に、小職が隊員当時配属されていた大学の同僚や、教え子のうち、その何人かに再会することが出来た。大学の講師仲間だった 1 人は、その後、UKMS の教授になり、サバ大学に改組されたあとも数年間副学長を務め、新生大学の発展に尽くしたようだ。今は、また教授として教鞭をとっている。

地質学を専攻していたはずの教え子の一人は、どこでどう道間違え

えたのか、財務本省の内国歳入庁(日本でいう国税庁)の副長官になっていた。また、一人はサバミュージアムの館長に、さらに、ある一人はサバでも有名なコミュニティー開発支援 NGO の代表として世界各国の援助機関との協力事業に携わっているなど、それぞれに活躍してきたことを知り、改めて、30 年という年月の長さを実感した。

堅 調 な 発 展 ぶ り

私が二回目に赴任した 2010 年、マレーシアは、7.2%の経済成長率を達成した。また、一人当たり GDP は、30 年前の約 1,800 米ドルから約 8,400 米ドルとなり、アセアン諸国の中では、先行している先進国シンガポールや、石油大国ブルネイに次ぐ、第 3 番目の経済大国である。最近マレーシアに行かれた方は

ご存知だろうが、KLIA と呼ばれる近代的な国際空港に降り立ち、KL 市内に向かうと、そこには整備された高速道路がある。また、鉄道好きには、空港と市内を短時間で結ぶ「KLIA エクスプレス」という快適な高速列車の選択も可能だ。KL 市内には KL ツインタワーとの愛称があるペトロナスビルを始めとする数々の高層ビル群、市内中心部を走る地下鉄やモノレール、さらに市内を縦横に貫く高速道路がある。30 年前に最先端を走っていた BB プラザや、当時の最高級ホテルだった Equatorial Hotel もいまだに現役であるが、数年前にできた Pavilion と呼ばれる高級ショッピングモールや、その後になって建設された多くの 5 星ホテルに圧倒されている。



このように発展した姿を見せるのは KL 近辺だけではない。例えば、今ではマレーシア 13 州ある中でも最も貧しい州と言われているサバ州であっても、Kota Kinabalu を中心とする都市部中心に道路インフラが整備され、KK 市内中心部には近代的なショッピングモールも立ち並ぶようになり、空港周辺のリゾートホテルと相まって瀟洒な小都市の様相を見せている。ちなみに 30 年前のサバ州は木材産業が盛んだったこともあり、セランゴール州に次ぐ、経済的に豊かな州であったが、現在では、マレーシアの最貧州になっていて、州の開発目標には「貧困撲滅」が、その一つとして挙げられているのではあるが。

半島マレーシアと東マレーシア、また、都市部と地方との格差問題が顕在化している点是否めないものの、この 30 年間に国の全体的な底上げがなされてきたことは間違い。

Wawasan 2020 と経済政策

もちろん、この約 30 年の間、マレーシアは、順風満帆だった訳ではない。他のアジアの国々と同様に 1997 年にタイから派生したアジア通貨危機を経験したが、独自の経済運営の効果もあって数年で危機を脱した。また、2009 年には、リーマンショックに端を発した世界同時不況に見舞われたが、電気電子製品等の工業製品の旺盛な輸出力を頼りに、翌年には見事に回復している。このようなマレーシアの安定した「経済運営」や、また、他の多くの国がその対応に苦慮している民族問題についても、「民族融和政策」をもって見事に切り盛りし、今日のマレーシアを築き上げてきたものといえる。

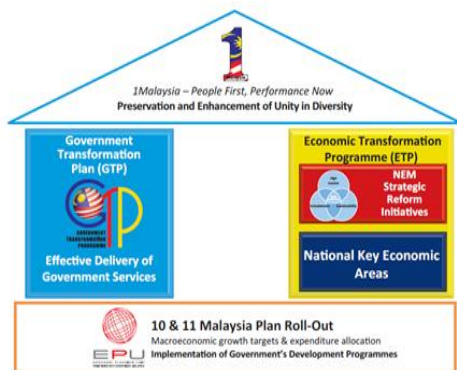
注1) UKM サバ分校は、1994 年にそれまでの理学部だけの単科大学から、総合大学としての Universiti Malaysia Sabah となり、現在に至っている。



ワンマレーシアのロゴ
市内いたるところに溢れている

そして、このような国家運営によって培われた力は「自信」となり、マレーシアは 2020 年までには先進国の仲間になるのだと、その目標を謳った「Wawasan 2020」を改めて宣言し、現在のマレーシアが実施する経済政策の大きな柱となっている。

今回、私がマレーシアに勤務した 2010 年 3 月からの約二年間とその前後は、マレーシア政府がこの政策目標を達成するための様々な政策を打ち出した時期だった。上述した、先進国入りの目標を掲げた「Wawasan 2020」(注²)。そして、この政策目標達成のために、「1 マレーシア」、「政府改革計画 (GTP)」、「新経済モデル (NEM)」、「経済変革プログラム (ETP)」、「第 10 次マレーシア計画」と、現政権は、立て続けに政策を発表した(注³)。



先進国入りのための政策フレームワーク

マレーシアの強みは、このような政策を独自に策定することもあることながら、これらの政策を確実に実施に移すシステムと、これらをしっかりとモニタリングする組織を作ったことだ。まず、役所／役人には「KPI」を課した。「KPI」、すなわち、Key Performance Index (主要業績指標)。大臣から末端の公務員に至るまで、組織／自身の行動目標を立て、その達成状況をモニター／評価するもので、その達成状況如何では、給与に反映されるだけではなく、クビまで危うくするものでもある。また、首相府に「Performance Management Delivery Unit (業績管理執行局)」⁴を設置し、まさにこの KPI の実施状況を管理することとした。相変わらず、公務員の汚職は問題になっていて政府改革計画の重要課題にもなっているが、自らを律するこのような制度を作ったことは、賞賛に値する。あとは、これをしっかりとワークさせることだが、これに期待したいものだ。

注 2) 英語ではビジョン 2020 と訳される。1991 年、当時のマハティール内閣が掲げた開発目標

注 3) 一般には「先進国入り」、「高所得国入り」を目指すとしているが、マレー語では、Negara Maju, Negara Pendapatan Tinggi としている。具体的には、15,000 米ドルから 20,000 米ドル/1 人。

注 4) ちなみにこの Unit は略して「PEMANDU」と称される。運転手の意味だ。英語が略語にされると、その役割を的確に表すマレー語になっている。



マレーシア首相府の建物 国家運営の中枢機関

開発途上国と呼ばれている多くの国が抱える問題の一つは、自らの力で、このように目標を設定し、その目標達成のための政策を策定し、それに基づく国家運営が出来ないことだ。今のマレーシアを見てみると、今後、どのような結果が見えてくるのかは予断を許さないものの、過去 30 年の間に、そういった問題はクリアしてきているようだし、そのことが今のマレーシアを築いてきたものと思える。

2020 年まで、あと 8 年。国が掲げる目標達成のために国民が一丸となっていけるだろうか。マレーシア経済に見え隠れしている、いわゆる「中進国の罠」という問題も克服しなければならぬ中、果たして彼らの掲げる先進国入りの目標が達成できるのだろうか。今後 8 年の間に何が起るのか、これからもしっかりとマレーシアという国を見ていきたい。いずれにしても、今回の駐在で、こんなマレーシアの成長を目の当たりにすることが出来たことは、30 年前のマレーシア知る者として自分のことのように嬉しい。

終わりに

駐在中に、何人かの友人がマレーシアに遊びに来た。そのうちの一人が、マレーシアの人たちを見て「何かみんな自信に満ちていて、生き生きしているようだ」と言ったのを今でも覚えている。その時には、ほんの数日マレーシアに居ただけで「わかったようなことを言って欲しくないなあ」などと内心思ったりもしたのだが、任期を終え日本に帰って来てみると、あながちその印象は間違っていないと、今になって思う。やはりマレーシアの人たちは、みんな生き生きしていたと。翻って、今の私たち日本人はどうだろう。ちょっと元気が不足義務。それはきっと私達に「マレーシア」が足りないせい。

そうすると、やっぱり、Rindu pada Malaysia !!

皆で、「マレーシア」を補給しに行きましょう。



Kuohing の子供たち

また春は来る！何度でも来る！

井上昌夫（53 年度 1 次隊）

マレーシア OB・OG の皆様元氣でご活躍のことと
 思います。こちらは、帰国後種苗メーカー勤務を経て、
 2006 年に惣菜等の食品メーカーに転籍し、以降新
 事業として高品質野菜の生産に身を投じております。
 昨年 3 月 1 日には、福島県石川町で民間資本による農
 業法人を設立しました。

ハウス 81 棟を使い、千葉大学はじめ 4 社による連
 携事業により、EU ガイドラインをクリアする高品質
 ホウレンソウ栽培です。低硝酸で高い栄養価、高い収



量、高い加工歩
 留を可能とす
 る「大きな・大
 きなホウレン
 ソウ」です。自
 動 車 の
 HONDA が、か
 つてアメリカ

のマスキー法をクリアする自動車エンジンを開発し
 たように、日本農業の存続をかけて、品質優位のあの
 ポパイホウレンソウ缶詰の輸出も夢みながら意気込
 んでの挑戦でした。が、昨年 3 月 11 日の東日本大地
 震は先人たちが築き上げてきた多くの生活基盤を一
 瞬にして奪い、追い打ちをかけた原発の爆発には手の
 施しようがなく呆然とするばかりでした。収穫最適
 期のホウレンソウは出荷制限となり、全量廃棄を指示
 されました。法人設立後僅か二週間足らずの出来事。天
 を仰いでこの非情さを恨み、さすがに悔し涙が流れま
 した。



福島の農業生産法人ハウス

その後、現地スタッフと福島を離れるかどうか話し
 合いを続けました。結果は、ここで投げ出す訳にはいか

ない。勝たなくとも負けないで、何としても継続して
 後世につなげていく・・・その想いだけで今に至って
 います。しかし、放射性物質への不安は、今なお私た
 ちに強烈な風評被害を与え続けています。

私の住まいは福島から 300 km ほど離れた埼玉
 県日高市。ここでは、まちづくり委員長、自治会長を
 拝命して十年近くになります。この地に移り住んで暮
 らし始めた多くの大人たちは還暦を迎えつつあり、そ
 の子どもたちは成人となりこの地を離れていく年代
 となりました。少子高齢化による人口減は、施設や家、
 田畑の放棄地を加速させています。そんな中で何を後
 世に残せるのか議論が続いています。原発しかりです
 が、未来は誰も経験したことのない未知の世界。不安
 におびえて目の前に嘔みついても虚しいだけ。時間が
 あれば近くの 100 坪菜園に出かけますが、そんな時
 に巡り合う小さな感動が心の糧になって、少しずつ気
 持ちが前向きに変わってくるのは命ある証でしょうか。

マレーシアでの活動を含めて 30 数余年、人気もな
 く放棄された農地や施設に出くわした時、何とも言い
 ようのない虚しさに襲われます。そんな春、可憐に咲
 く満開の桜を目にしたときは、「また春は来る！
 何度でも来る！」と気持ちが高揚するのですからサ
 クラは不思議です。これからの日本は「懐かしい未来」
 の空気が似合います。後世に何を伝え、何を残したい
 のか、それだけで生きていいのではと、想うこのごろ
 です。



埼玉県日高市の小生菜園

第1回マレーシア会 KL 旅行記

(2011. 11. 3~11. 7)

高橋明美 (55 年度 1 次隊)

マレーシアは雨季ということで、天気予報では来年の3月頃まで不安定な曇り空が続くとのこと…。そのため3日から6日の夜まで、降ったり止んだりが続いたが、お蔭さまでぬれずにすんだ。(日ごろの心掛けが良かったのか…笑!)

今回は KL に OB の永江氏 (JICA 事務所) が駐在していたため、KL の事情に詳しく事前にプランを立てて頂き、出発前に皆が日程等の把握が出来た。何より KL の交通事情に精通しているので今回の旅行が充実し、高速を使って行けるマラッカ観光・ツアーに参加しなければ行けない郊外の手こぎ船での蜚見学にも効率よく回る事が出来た。

余談ですが、マレーシアの高速の料金所は JR・メトロのカードスタイル式。これは日本でも取り入れて欲しいな～と全員が感心! これぞハイテク! 何のしがらみも無く便利なものは何でも取り入れるマレーシアの良い面だと思いたいである…。



市内なら周遊観光バス (1 日 RM38) がどこでも乗り降りができるので便利で、もしこれから行く方はまずこれに乗り1周してから、旅を始めるのも良さそう。



マレーシアの特に KL の町並みはずいぶん変わり、観光客はあふれ、各国のブランド店や有名店が並び、日本にいるのと変わらない。今や世界の大都会にも引けを取らないと思う。KL タワーからの眺めは途上国だ

ったマレーシアの印象を一掃する。永江氏からの情報では、イスタナ (王宮) が近々引っ越しをするらしい! 写真に小さく写っているが…以前は町中の森にあったイスタナは、丘の上の見晴らしの良いところに新しいのを建設中だ。タワーから肉眼でも確認できるくらい以前の数倍にもなるのだからすごい!!

OV の皆さんはご存知の事と思うが食事はやはりおいしい!! マレーシアにいる間はマレー料理・中華など何を食べてもおいしいかった。

ホテルの朝食はイスラム食や、日本食はいうまでもなく、どんな人にも合うよう用意され、果物も豊富に食べられた。私は久しぶりにクイティヤオーや朝粥など堪能した。辛さも十分でした!!



町中の人々は相変わらず人種が入り混じり、何カ国語もつかって会話が進む…。以前とちょっと違うのが、全身黒いマントに身体を包む女性と T シャツ短パンの男性のカップルや家族連れに沢山会ったこと。サバでは見かけなかった光景でした!

ホテルでも沢山見かけたということは観光で訪れる方々が多いということなのだろうか、家族の中で一人だけ黒いマントの夫人が食事をとる姿は私には異な光景で、夫人だけが食べづらそうに見えるのは私だけかしら?

とにかく今回の旅行は内容が充実していて、とても普通の4日間で周りきれない程の名所・旧跡・買い物にも…行って来ました。そのため朝は8:30分頃にはホテルを出発、11:30ごろに帰ってきて深夜1:30頃に就寝という充実ぶりで少々寝不足でした!! ^ ^

とても3日~4日では足りないですね～。出来ればもうちょっと居たかった!



楽しい旅行をさせて頂いた陰の功労者永江氏はもちろん良子さん(55-1)前島さん(57-3)にもお礼が言いたい。

食事やお土産購入の為の時間も考慮の上、荷物の事まで配慮いただいた。お蔭さまで皆体調も変わりなく元気に帰国しました。

今回の旅行をふまえ、「プチマレーシア旅行」などをマレーシア会で企画していくのも面白いと思います。また地図の作成(季節・各月の特徴をいれる)観光地の地図に高速やエリアの簡単な交通網・渋滞状況などの参考になるものを加えるなど、使い勝手の良い隊員・OBならではの物が作成できると面白いかもしれない。



第5回協力隊まつり

4月21日22日、JICA地球ひろばで第5回協力隊まつりが開催され、青年海外協力隊マレーシア会も出展致しました。マレーシアに興味がある方、マレーシアへ行ったことがある方など多くの方が、ブースを訪れてくださいました。今回は、ちょこっとマレー語講座や物品販売がブースの主な内容でした。まつりなどのアイデア・実行委員募集中！



= お知らせコーナー =

帰国報告会

下記要領でマレーシア隊員の帰国報告会を開催いたします。参加をお待ちしています。

日時：平成24年7月17日(火)19時～20時

場所：JICA地球ひろば(広尾、元協力隊事務局)

報告者：捧 文子

(平成22年1次隊 作業療法士)

浦井 加奈

(平成22年度1次隊ソーシャルワーカー)

クランタン州・パハン州での福祉に関する活動報告です。

研修員との交流プログラムを計画中

9月5日(水)～9月21日(金)までJICA青年研修(行政管理コース)が実施され、マレーシアから若手行政職の方が研修で来日の予定です。9月8日(土)午後をマレーシア会で都内案内、文化体験のプログラムを組みたいと考えています。興味がある方、ぜひ参加ください。プログラム案などご意見もお寄せください。

マレーシア出入国カードが廃止になりました

今までのように出入国カードの記入は、不要になりました。マレーシアへの入国は、パスポート提示と指紋認証だけとなります。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と2010年の青年海外協力隊OB/OG会出席者にEメールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在310余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会 会長白山肇
106-0047 東京都港区南麻布 5-2-39
ニュー東和ビル 503 国際協力サロン - Together
TEL 03-6277-3772 FAX:03-6277-3775
MAIL:malaysia@ics-together.com